

東方赤龍伝

乙ドラ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

兵藤一誠が殺されてしまった時、本来悪魔を呼ぶのだがその選択が選ばれず今回呼ばれたのは悪魔ではない別の存在。

この物語は本来の「✓を外れ、ifの「✓を進む兵藤一誠の冒険譚である。

目

次

まさかの i f ✓ 突入

兵藤一誠の魔法体験

紅魔館のニューバトラー

13 8 1

## まさかの i f ✓ 突入

俺は、殺された。ついこの前告白された相手の夕麻ちゃん…いやレインナーレか。彼女は実は堕天使であり、危険な存在になりうる可能性があり狙われ、光の槍というもので貫かれ殺された。

そう、殺されたはずなのに今俺は生きている。何を言っているかわからないかも知れないが今現在、俺は地面に横たわっていた。体を触れば触った部分の感触はしつかりと伝わり、レイナーレに貫かれたはずの胸あたりを触つてもそこにはしつかりと自分の体があつた。穴が空いているわけでもない健康体だつた。

「なんで俺は…たしかにあの時死んだと思つた。めっちゃ痛かつたし…。」

体を起こし辺りを見回す。そこには湖があり、うつすらと霧で包まっていた。後ろを見れば森が広がつていた。森に行くよりは来た道がわかりやすい湖の方に向かうことにした。誰か人が見つかれば、何かわかるかもしれない、人を探しながら湖の周りを回るようにして歩くことにした。

20分くらい歩いた後、少し舗装された道を見つけた。今まで歩いてきた道は草が生い茂つてたのに対し、その道は草はしつかりと刈り取られており、道とわかるものだつた。

「この道を進めば誰かに会えるかもしれない…。」

少しばかり体に限界が来ていた。20分程度しか歩いてないはずなのに足は重くなり、腹が空き体に力が入らなくなってきた。それでも助かるために歩き続けた結果、目の前に大きな屋敷が見えた。

「やつと…建物…見つ…け…。」

一バタン。

???視点

「スヤア…スヤア…ハツ！ いけないいけない、流石に二回目はナイス

だけじや済まなくなるところでした。」

「後頭部に刺さったナイフを抜いて、己の仕事を全うすること誓う。がすぐさま睡魔に襲われる。

「休みが欲しい…ん? 今なにか引っかかりましたね。」

私が貼っている気のレーダーに何かが引っかかった。侵入者が、客か。でもなんだか気が小さくなつて行つてる。少し見に行つてみますか。

多分こち辺に…あつ! 人が倒れますね。まあ人が倒れてるのとか日常茶飯事ですし慌てなくなつてきましたね。とりあえず館の方に持つていきますか…。よいしょっと。あれ? この人なんだか変な気が…

### 兵藤視点

「知らない天井だ。」

目を開けると見たことのない景色が広がっていた。どうやらベッドに寝かせてもらつているようでめっちゃフカフカ。周りを見ると豪華絢爛な装飾が施されており、どこかの貴族の部屋のようだつた。

「たしか俺は湖のところで…。」

「目が覚めたようですね。」

「うおっ!」

ここで目を覚ます前のことを思い出そうとしていると横から急に女性に声をかけられた。あれ? ドアから入つてきてたかこの人。

「えつと、助けていただきありがとうございます。」

ベッドの上であるが、助けてもらつた礼をするため、体を女性の方に向け、礼をする。

「いえ、働かない門番が珍しく仕事をしてましたのでそのついでのようなものでしたので。」

ふむ、つまりここに運んで助けてくれたのはこの人と門番さんか。後でお礼を言いに行かないと。てかこの人すごい美人だなあ、メイド服着てもう眼福、最高です。

メイド服つてことはこここのメイドさん?なら家主もいるよね…? そう考えてたらドアがガチャリと音を立てて開かれ、幼女が入ってきた。

「目を覚ましたようね。」

「はい、お嬢様。」

おつ、お嬢様つてことは家主の娘か?是非とも挨拶しないとな。「ここにちは、俺は兵藤一誠。気軽にイツセーつて呼んでくれると嬉しいな。ここ)の家主の人にお礼を言いたいんだけど挨拶に行つてもいいかな?」

「別に構わないわ。」

そう言つてその場で威厳を出すように少しふんぞり返つてこちらを見ている。ちつちやい子がこういうことすると可愛いよなあ…つて危ない危ない。早く挨拶に行かないと。

「えつと…家主のところに案内してもらいたいんだけどいいですか?」

メイドさんにそう聞いてみた。するとメイドさんは何を言つてるのか良くわからないと言わんばかりに首を傾げた。

「あのー、家主の所に…。」

「ここ)にいるじゃない。」

幼女が言つた。

「え?メイドさんが家主?」

「違うわよ!こつち!私よ!!」

「ええええええー!?!」

まさかの幼女が家主でした。

「えつでもどう見ても幼女にしか…。」

「幼女じやないわ!」

「お客様、説明させていただきますと…」

少女説明中……

「吸血鬼だつたんですか…。」

「あら、驚かないのね。」

「（こ）に来る前に墮天使とかいうのに会いましたからね。」

「一応、殺されたはずであるという話は伏せておいた。死人が生きてるって不思議すぎてねえ？」

「なるほど…だからあなたの運命は歪んでたのね。」

「運命？」

「私は運命を操る程度の能力があるの。今あなたの運命をのぞかせてもらつたけれど、もう一つの運命が捻れて複雑なものになつてるので。」

「俺の運命が複雑？ もう一つの運命？ 一体どういう…。」

「まあ詳しい話は食事をしてからでどうかしら？ 咲夜、準備お願ひ。」

「はい、お嬢様。」

メイドさんが返事を返すとスッと姿を消した。なにこれ瞬間移動？ 実は俺の憧れの空孫悟と同じ種族？

「いいんですか？ 助けてもらつた上に食事まで。」

「いいのよ、私はあなたに興味を持った。これだけの理由があれば十分よ。」

「ありがとうございます！ えっと…。」

そう言えば名前だけ聞いてなかつたな。名前がわからずなんと言えば戸惑つてると。

「レミリア・スカーレットよ。」

と答えてくれた。

「ありがとうございます。レミリアさん。」

「どういたしまして。さ、行くわよ。立てる？」

ぶつ倒れたけど体の調子が戻つてし多分立てるだろう…。おつ、ベッドから降りたけど普通に立てたな。

「大丈夫です。調子も大分戻つてきました。」

「そう、あとその丁寧口調みたいなのが辞めなさい。似合つてないわよ。」

敬語に似合つてるとかつてあつたつけ…。まあそう言われたしいつも通りでいいか。

「分かった。こんな感じでいいか？」

「そうね。そっちの方がいいわ。あと呼び捨てで構わないわよ。今はね。」

そう言うとレミリアはくるりと体の向きを変えドアの方に向かつていった。俺はその後について行く。ていうか今はつてどういうことだ？

レミリアについて行き、食堂についた。道中の廊下が長くてびつくりした。それに妖精見たいのも飛んでたし。気になつて聞いてみたら妖精メイドと言つてこの屋敷で雇つているらしいが、殆どがあのメイドさんがやつてているらしい。あとそのメイドさんの名前も教えて貰つた。十六夜咲夜と言うらしい。メイド萌がいける口の俺としては最高でした。

そこで食事を頂くらしいのだが、一緒に食べる人がもう少しで来るらしく待つことになつた。一緒に住んでる友達だそうだ。どんな人なのか考へて いるとレミリアに声をかけられた。

「ねえイッセー。あなたに聞いておきたいことがあるのだけれどい

かしら？」

「別にいいけど、聞きたいことつて？」

「あなたのの中にあるもう一つの運命。正確に言えば別の魂の運命。その事含め色々調べたいのだけどいいかしら？何か知つてたらもう一つの魂の事について一緒に教えて欲しいのだけれど。」

「大丈夫だけどそんな話初めて聞いたからなあ。俺は何も知らないな。」

俺の中の魂とか言われてもそんなの初めて聞いたしな。別に多重人格つて訳でもないしな。

「そう、あと調べる時に私の友人にも手伝つてもらうわ。一緒に食事する子なんだけど…噂をすればきたわね。」

「レミイイが一緒に食事しようなんて誘うなんて珍しいわね。」「たまにはいいじやない。」

「大体そういう時は面倒事を持つてくるけどね。」

そう言いながらレミリアの斜め前の所の席に座つた。後ろで飛ん

でいた人もその隣に座つた。ちなみに座席は、長テーブルのお誕生日席にレミリアが座り、そこから向かって左側に先ほど来たレミリアの友人と飛んでた人。その正面に俺だ。

「で、そこの人間は誰？」

「俺は兵藤一誠です。さつきぶつ倒れたところを助けてもらいました。」

「さつき咲夜が言つてたのはあなたね。私はパチュリーよ。あと呼び捨てで構わないし敬語を使う必要も無いわ。」

「わかりま…わかった。」

なんかこう、年上系の美人つて感じで緊張しちやうな。敬語じやなくていいって言われたけどいつも通りの口調でなかなか行けない。「ねえ、私の時と反応違うわよね？違うわよね！」

レミリアは幼女にしか見えないからいけるんだよ、とは言えるわけもない。なんて誤魔化すか考えてるとパチュリーが、あれじやないかしら？と言つて助け舟を出してくれた。

「あなたが幼女にしか見えないから。」

「幼女つてあなたねえ！イッセーもそう思うのかしら!?」

ここで俺に来るか。なんて返すべきか…。返答に悩み無言が続く。

「沈黙は肯定っていうわね。」

「イッセー…。」

ちょっととレミリア。後ろになにか見えるんだけど。殺意を元にした魂のヴィジョンか何かですか怖いよ。

「お嬢様、食事の支度ができました。」

「…そう。なら頂きましょう。」

咲夜さんが料理を並べていく。並べられるのは魚料理、そしてサラダに米、味噌汁。飲み物はお茶だつた。まさかの和食ですか！

レミリアさんのところの飲み物は…ワイン？ワインなんて和食に合うのか？

「レミリアさん、和食にワインつて相性いいもんでしたつけ？」

「ワイン？何を言つてるのかしら。これは血よ。」

「血イイ!?」

そうだ、レミリアさんは吸血鬼だつた。血って言うことはまさか人をさらつて!?

「この血は人里の皆さんに協力してもらつて採血されたものです。定期的に人里で採血を行つています。」

あつ、なんだ。献血みたいな感じか。いやあ焦つた焦つた。

「そうでしたか。血つて聞いてめっちゃ焦りましたよ。」

「まあそうでしょうね。さ、冷めないうちに頂きましょう。」

…(こ)馳走様でした。え? 飯の感想?俺の語彙力じゃ伝えられるかわからぬけどこれだけは言えるな。

遠〇十席涙目になるであろうくらいは美味しいかつた。舌が肥え  
そうちだぜ…。

## 兵藤一誠の魔法体験

美女美少女だらけの食事会を終えて図書館に来たんだが…広くね!?近所の図書館とかたまに行つたけど比にならない程だ。流石地下の大図書館。

「それじゃあ、準備しておくから軽く説明しておいて。」

「はい、わかりました！」

そう言うとパチュリ一はでかい机のある所に行き、作業を始めた。  
「それでは、説明しますね。」

「はい！」

小悪魔は、自分のポケットからメガネを取り出してそれを掛けた。見事なまでの美人教師の様に見え、心にぐつと来るものがあつた。やつぱり美人教師は最高だぜ！

心の中でガツツポーズを決め、小悪魔の説明に耳を傾けた。

少女説明中…

「…という感じです。」

「は、はい…。」

結論から言おう。全くわからん！一応どうすればいいかはなんとなくだが分かつたが、その調査の仕方…原理みたいなものも一緒に説明されたがわからなかつた。魔術とか魔法とか色々言つてたが流石にそこまで対応出来なかつたぜ…。

「そろそろパチュリ一様の準備ができる頃ですし行きますか。」「わかりました。」

小悪魔が先程パチュリ一が向つた机の方へ歩いていったのでそれに俺もついて行つた。

「ふう…こあ、こつちも準備できたわ。」

「はい、パチュリ一様。それではイッセーさん、そこの魔法陣の上に立つてください。」

「わかりました。おお！魔法らしくなつてきた！」

これが魔方陣か、何書いてあるか分からぬけど魔法つてやつぱ心が踊るな。こんな形ではあるが魔法を体験できるのはいいな。

「それじゃ、魔女の魔法つてものを見せてあげるわ。」

「お願いしやアアつす！」

パチュリーサンは手に持つていた大きな本を開き、呪文を唱えていく。それに合わせて、魔法陣が光り輝き出した。すっげえ！俺ワクワクつぞ！！

パチュリーサンはそのまま呪文を唱えながら、手に持つている本に手をかざしていく。そして少し時間が経つたあと、呪文を読み終えた。それと同時に魔法陣から光が失われた。

「もういいわ、楽にして。」

「はい、それで結果はどうでした？」

「詳しいことはまだわからないわ。今のはデータを取つただけで解析自体はまだなの。少し時間がかかるから今日はもう大丈夫。明日また来て頂戴。」

うーん、結果はまだなのか。やつぱり自分の中身つて結構気になるんだな。もう一つの魂つて言つてたな。実は俺スタ○ド使いだつたりするのか？ジヨー○タ一家の末裔？まああれは魂のヴィジョンがうんたからんたらとかで自分の魂だし関係ないか。

「わかりました。」

「…あなた敬語戻つてるわよ？」

「え…あつ。」

パチュリーサンは年上美人の雰囲気があるからなあ、自然に敬語使わないとつてなつちやうからな。心中でもたまにさん付けになるし。

「パチュリーサンはこう、年上美人つて感じがして自然と敬語使わないとなつて思つちやつて。」

「そ、そう。なら慣れるまでは敬語でも大丈グハアツ！」

「ええ！パチュリーサン大丈夫ですか！」

パチュリーサンが会話していると思つたらいつの間にか吐血していた！これ大丈夫か!?俺の服にも結構な量着いたしこれ危ないヤツ

じゃ…。

「あー、パチュリー様。大丈夫ですか？」

「え、ええ。なんとか大丈夫よ。久しぶりの本を開いたら埃が…。」

小悪魔が少し焦つたが手馴れた対応をしてる…。これよくある事だつたりするのか？

「実はパチュリー様は喘息持ちで、魔法とか運動を過度にしてしまうと吐血してしまうんですよ。」

「そうだったんですか…。」

「私は大丈夫だから、今日はもう休みなさい。」

そう言うが少し顔色が悪い。流石にあれはヤバいって。

「本当に大丈夫なんですか？俺に出来ることあれば何でもしますよ！」

「そう…それじゃ戻る時でいいから咲夜にこの事を伝えて欲しいのだけど、お願ひしていいかしら？」

「はい！全力で行ってきます！」

急いで咲夜さんにこのことを伝えないと！俺のために魔法を使いここまでやつてくれたんだ。少しでも早く体調を良くしてもらうため全速力で行くぜ！

少年疾走中…

いた！咲夜さんだ！

「すいません！咲夜さん、パチュリーさんがさつき血を吐いて…。それで咲夜さんに伝えてくれと…。」

「事情はわかりました。そこの妖精メイドに部屋を案内させますので、そこでお休みください。」

そういうと少し急ぎ目で咲夜さんが大図書館の方へ向かう。だけど俺は黙つていられなかつた。人が倒れていると知つてて休めるわけが無い。

「咲夜さん！俺にもなにか出来ることはありますか!!」

何も出来ないかもしないけど聞かずには居られなかつた。する

と咲夜さんは意外なものを見る目でこちらを見てきた。何か変な事言つたか？

「…わかりました。すこし男手が必要になるかもしませんのでお願ひします。」

「そして先程まで見てた完璧なメイド顔にもどりそう言つてくれた。「ありがとうございます」とうございます！」

「それでは行きますよ。」「そういつた後こちらに近付き肩に手を乗つけられた。えつ！なぜこのタイミングで！？」

「あ、あの咲夜さん！？」

「大図書館の方に向かいますのでしばしお待ちを。」

慌てながら咲夜さんを見てると、空いた右手で懐中時計をもち、それを開けていた。

すると次の瞬間、さつきまで大図書館から離れた廊下にいたはずなのに大図書館まで移動していた。

「これについては後で説明します。ひとまずパチュリ様の治療を。」

「は、はい！」

咲夜さんは手馴れた手つきで吐いた血を拭き、作業を進めて行つた。小悪魔さんもそれを手伝い、俺は薬を運んだり本を避けたりして行つた。

「これで大丈夫でしょう。」

「ふう…良かつた。」

パチュリ様の治療等が終わり一息付けるほどになつた。

「お客様、手伝つていただきありがとうございます。」

「いえ、俺がただやりたかつただけなので。気にしないでください。それに役に立てるほど動けたわけでも無いですし…。」

「そんなことはありません、お客様のお陰でスムーズに進めることができました。」

「なら良かつたです。」

良かった、お世辞か本音かは読めないが少なくとも邪魔にはなつて

いなかつたようだ。安心安心。パチュリーサンも無事っぽいし。

「あつ、お客様。レミリアお嬢様から伝言を預かっています。今日は部屋を一室貸すので泊まつていつてもいいと仰っていました。そして明日の朝、話があるから一度会いに来てほしいとのことです。」

「わかりました。ありがとうございます。」

感謝、圧倒的名ほどの感謝しかない。行く宛無かつたし泊めてもらえる野はとても助かる。明日の朝にでもレミリアにお礼を言おう。

「それでは部屋に案内します。」

少女案内中…

「今晩はここでおやすみください。何かあれば妖精メイドに伝えてください。」

「お、おお…。」

使つていい部屋まで案内されたのだが、本当にいいのかこれ。人3人くらい寝ても大丈夫そうなベッドにソファ、暖炉と揃つてる。並の高級ホテルより凄い。

「それでは失礼します。」

「あ、はい。ありがとうございます。」

さて、こんな豪華な部屋で寝れるか分からぬけど今日はもう休み。明日のこと考へないといけないけど明日のことは明日の自分に任せよう。そうしよう。

## 紅魔館のニューバトラー

「知ら…知ってる天井だった。」

目が覚めたら豪華な天井が目に入る。昨日泊まつてつていいつて言われたからなあ。超ありがたかつた。

「んで朝に確かレミリアからの呼び出しがあつたけどどうやつて行こうか…。」

どうしたものか…。確かに昨日咲夜さんが何かあつたら妖精メイドに言えつて言つてたし伝えればなんとかなるかな？

昨日寝る前にバスローブみたいの貰つてそれ着たから1回制服に着替えるか…。

少年着替中…

よし、これで行くか。

部屋のドアを開け顔を出し妖精メイドが居ないか確認するが…おつ、いたいた。それじや声をかけに行くか。

妖精メイドのいた位置は廊下の端あたり、俺の部屋が廊下の真ん中くらいだから歩いて…一分のところにいた。長くない？ここ）の廊下。「すいませーん。ちょっといいですか？」

「はい、何でしようか？」

「レミリアのところに行きたいんだけど…案内してもらつていいですか？」

「かしこまりました。それでは案内します。」

本物の妖精さんだ。めっちゃ可愛いとは思うけどイメージと何となく違うな。今目の前にいるのは子供くらいの大きさだし普通に可愛らしいだけだ。俺のイメージは手のひらサイズくらいのちつちやい感じをイメージしてたんだけどな。だが、これはこれでいい！エロい目線がばれないようにしないと…。

妖精案内中…

「……」です。それでは私はこれで。

「ありがとうございました。」

妖精さん……基妖精メイドさんはふらふらと飛びながら来た道を戻つていった。

ちょっと緊張してきたな……。よし、いくぞ。コンコンとノックをして……あれ? ノックつて三回だつたつけ? 二回? もういい! 感だ、3回でいこう。

コンコンコン……

あれ? かえつてこない。回数ミスつた? どうすりやいいんだこれ。返事帰つてきてないから入るわけも行かないだろうしな。どうしようか……。

「どうかされましたか?」

「うおっ! なんだ咲夜さんでしたか? 実はレミリアと話しに來たんですけど、ノックしても返事が帰つてこなく……」

「そういう事でしたか。少々お待ちください。」

そう言うと咲夜さんはレミリアの部屋へと入つていった。

咲夜さんが入つてから五分くらいしたくらいか? レミリアの部屋のドアが開き、咲夜さんが出てきた。

「お待たせしました。それでは中にどうぞ。」

「ありがとうございます。」

中で何があつたか気になるが……聞かないでおこう。俺の第六感が聞くなと言つている。

「失礼しまーす……」

中はもう凄かつた。俺が借りた部屋もなかなか豪華ですがかつたがここは別べクトルで凄い。壁には豪華絢爛な装飾が施されておりしかもすつごいイスがあつた。ほら、国王様とかが座つてそうな感じ

の。そこにレミリアが座つておりこちらを見据えてる。驚くのはそこじやないんだ。

ベッドの上に棺桶があるんだが…。

いやいや！棺桶ってなに!?用途なんなの！

「あまりレディの部屋を見回すものではないわよ？」

「あつ、すいません。」

流石にキヨロキヨロしそぎたか…。とりあえず棺桶は置いておいて本題に入らないとな。

「そういうや話があるってことでこっち来たんだけど話つてなんだ？」

「そうね、話というのはあなたにとつてもいいことだと思うわ。」

「いいこと…だと？」

「ええ、あなた幻想入りした後の人間がこれからどういうこうどうをするか知ってる？」

唐突にされた質問。少し考えてみたが…自分の出せた答えは生きるための行動…か。

「生きるために…衣食住を求めるとか？」

「ふーん…いい思考してるわね。少数ではあるけど確かにそういう行動をする人間がいるわ。」

「少數つてことはほかの多くはどういうことをしてるんだ？」

「己の夢、野望を実現しようとするわ。実際私達もそういう目的があつたのよ。今はもうしてないけどね。」

ふむふむ…ん？でも少しだけおかしくないか？

「その話だとこっちに来てすぐになにか企もうとするのか？無計画にも程がないか？」

「あなた…バカかと思つたけど結構頭回るのね。」

「ば、バカッて言うな！」

いやまあ、テストとかの成績はちょっと低かつたかもしれないけど…まあ入試の時は全力出したからノーカンつてことで。

「出、さつきの質問の答えだけど無計画ではないのよ。幻想入りする前から計画を立てたりするもののなの。」

「来る前から…自由にこっちに来れたりするもののなのかな？」

「特殊な方法を使えば、だけどね。」

ええ、てことは俺がいる間にそういう事件が起ころるかもしけないってことだろ？…不幸だ。

「少しばかり話がそれだけ最初に戻るわね。あなたは衣食住を求める、その答えでいいわね？」

「ああ。」

「それ、私が与えてもいいわ。それ相応の対価をもらうけど。」

「対価…だと？」

まさか急に貴様の血を貰うぞオー！とかつてなつたりしないよな？でも対価か…正直手ぶらで来てるから何も無いしな。何を求められるのか。

「ええ、ここで働くというのならその対価として衣食住を提供するわ。」

「おつ割と普通だつた。」

「あなた何を求められると思つてたのよ…。で、どうするの？」

「どうするか…まあ答えはもう決まつてるけどな。」

「ここで俺を雇つてくれ。俺に出来ることなら何でもやつてやるぜ！」

「いい意気込みね。それじゃ咲夜、指導頼むわね。一日で使えるようにしておいて。」

「かしこまりました。」

ほんと咲夜さんすげえな。気付いたらそこにいるんだぜ？てか俺も慣れたのかちよつとの事じや驚かなくなつてきたのな…。

「ああ、それと今後私のことはレミリア様、と呼びなさい。」

「レミリア…様？」

なんか慣れないなあ。てかまさかこれやるためだけに昨日の話があつたのか？会つてからはレミリア呼びだつたからうつかり出そうだな。

「雇い主なのだから当然よ。ほかの事は咲夜に聞きなさい。」「それでは行きますよ。」

「はい！」

そしてレミリアの部屋を出た後は咲夜さんの後ろをついて行き、別の部屋に案内された。

「それでは仕事の説明に入るのですが、その前に軽く自己紹介デモしておきましょうか。既に名前はご存知のようですが、私は十六夜咲夜。あなたと同じ人間、ここでメイド長をしているわ。」

「俺は兵藤一誠。えっと、こつち来る前は高校生でー…あ、チーズケーキとか好きです。」

「では一誠さん。これからして頂く仕事について説明させていただきます。こちらをご覧ください。」

そして一枚の紙を渡された。えっとなになに…執事についてか。…え？執事？あーメイドもいるし普通って事でいいのか？

「それでは説明していきますのでよく聞いてください。説明の後は館を案内しますのでどこに何があるか覚えていただきます。」

「はい！」

教わるからには全力で取り組もう！これも生きるためだし何より助けてくれた恩返しになるかもしれない。

はい…夜になりました…。朝仕事の話を貰つたんだけど…一日中説明漬けだった…。一日で覚えさせようとしてたみたいでもうやばかつた…。お陰で何とかなつた…とは思う。説明受けてた時のは割愛するわ。もう、やばかつたから。

明日から本格的に働くらしい。朝早いみたいだからもう寝る…。